

## 論文

## 易経にみる回文的思考

朱 捷

同志社女子大学・現代社会学部・社会システム学科・教授

Palindromic Structure in the *I Ching*

Zhu Jie

Department of Social System Studies, Faculty of Contemporary Social Studies, Doshisha Women's College of Liberal Arts, Professor

## Abstract

Some pairs of the hexagrams in the *I Ching* (*Book of Changes*) may be viewed as having the structure of palindromes, and the elements that make them up may be viewed as palindromes as well. The hexagram 師, (*shi*, Leading), for example, is the reverse of the hexagram 比 (*bi*, Grouping), and each of that hexagram's six *yao* 爻 (the whole or broken lines that make up the hexagram) is the reverse of the corresponding *yao*. The first *yao* of the hexagram 比, for example, is the sixth *yao* of the hexagram 師, while the sixth *yao* of the hexagram 比 is the first *yao* of the hexagram 師.

Whether it can be ascertained if there is in fact a reversible, palindrome-like relationship between these pairs of *yao* and their commentaries, and whether each of these paired *yao* shows a correspondence with and reversal of its counterpart's meaning is the question this paper takes as its subject.

This essay looks at seven pairs of hexagrams in which each *yao* is the mirror image of that of its corresponding hexagram, and, on the basis of the commentaries on each of the forty-two *yao*, for a total of eighty-four, determines that almost all of the pairs show this palindromic conversion of meaning.

## はじめに

易経「雑卦伝」は、卦の形が相反する二卦を一組のペアとし、「乾は剛に坤は柔。比は樂しみ師は憂う<sup>1)</sup>」、というように、ペアごとに相対する卦の性格を一言で要約している。このうち、乾卦と坤卦の陰（--）陽（—）配列は、



乾



坤

コインの表裏のように互いに相反している。一方、比卦と師卦は、



比



師

コインを逆さまにしたように、互いに上下反対になっている。

前者のような組み合わせは「錯」あるいは「旁通」、後者のような組み合わせは「綜」あるいは「反對」ともいう。

「雑卦伝」は、この「綜」卦を中心に、上下ひっくり返しても同じ形の卦（例えば乾と坤）を陰陽相裏返しのパアとして扱い、計三十二組を取り上げている。

もっとも「雑卦伝」が取り扱った最後の四組には、卦の形における相反が見られない。これについては昔から錯簡、つまり書き写しの誤りではないかという説がある。本稿はその議論に入らないことにするが、当面の関心として卦の形が相反すれば意味も対照的になるという「雑卦伝」の卦のとらえ方、および易経に「綜」の組み合わせが二十八組を数えることに注目したい。

ところで、この「綜」あるいは「反対」の組み合わせは、非常に回文的な性格を持つものである<sup>2)</sup>。たとえば、宋の李禺の詩「双憶」の一句、

a 夫	児 b
↓ 憶	憶 ↓
妻	父
兮	兮
父	妻
憶	憶
児	夫

「夫憶妻兮父憶児」を逆さまに読むと、「児憶父兮妻憶夫」になり、旅先で妻子を思う詩が妻や子が旅先の夫（父）を思う詩に変わる<sup>3)</sup>。

比卦をひっくり返せば、師卦になり、意味も「楽しみ」から「憂う」に変わるのは、まさにこれと同じである。

ただ回文の場合、逆さまに読むことによって起きる一句全体の意味の転換は、個々の文字の転換に支えられているのである。上の詩を例にいうと、a列の一番下の「児」が逆さまになると、b列の一番上の「児」に変わる。位置が変わるだけでなく、目的語から主語に意味も変わってしまう。こうして個々の文字の次元における位置の転倒による意味の転換もしくは再生が一句全体の意味の変化につながる。

ところで、「雑卦伝」が、卦の形が相反すれば意味も対照的になるとしているのは、卦の次元のことで、爻には触れていない。

卦は六本の爻から構成されている。六爻は下から、初・二・三・四・五・上と読み、順序はその爻の位（卦における位置）を示す。爻の陰陽は偶数の六（陰）と奇数の九（陽）であらわし、位の前に、たとえば六二、九三のように示される。ただ、初爻と上爻にかぎって、陰陽は初六、上九のように後ろに記される。

回文的に見ると、比卦の初六・六二・六三・六四・九五・上六は、ひっくり返った師卦の上六・六五・六四・六三・九二・初六に、それぞれあたる。

本稿の問題提起は端的に言うと、たとえば比卦の初六がひっくり返れば師卦の上六になるのだが、両者のあいだにはたしてa列の「児」とb列の「児」との関係が認められるのか、という一言である。

「児」はひっくり返ると、もとの意味を引き継ぎながら、新たな位置づけによって賦与された意味を獲得する。それと同じように、比卦の初六と師卦の上六のあいだに、意味の継承と転換がはたして存在するのか。

拙稿「回文にみる漢字文化的思考」において比卦と師卦を試みに考察したが、本稿はその再論も含めて、七組の「綜」のパアを取り上げてその「爻辞」（爻の説明文）を中心に検討しようとするものである。

## 一、損卦と益卦にみる回文的構造

「損」はへらす、「益」はます、損卦と益卦は卦名からして対照的である。



損



益

損卦の象にいう。「損は、下を損して上を益す。（中略）損益盈虚、時と偕に行う」。益卦の象にいう。「益は、上を損して下に益す。（中略）凡そ益の道、時と偕に行う」。象とは「象伝」

のことで、六爻からなる卦全体の意義を説く「卦辞」を解説するものである。損卦と益卦の象伝の文言を並べてみると、一方は下を損して上を益す、一方は上を損して下に益す、と卦の性格が相対していることがわかる。しかも本田濟のいうように、損卦は「下を損して上に益す、つまり人民の富を損して君主の収入を益すかたち。上を益すのだから益と名付けてもよさそうだが、下を損すほうに重点を置いて損と名付ける。この卦と対になる益卦は、上を損して下に益す、やはり下を基準にして名付ける<sup>4)</sup>」。つまり両卦は同じ問題をめぐって、同じ「下を基準にして」相対しているのである。

そのうえ、両卦の象伝は、同じ文言「與時偕行」（時と偕に行う）を共有している。下を損して上を益すにしても、上を損して下に益すにしても、行動を起こすのにタイミングが大事だと説かれている。

一方回文的に見ると、損卦がひっくり返って益卦になるなら、爻の次元において、損卦の初九、九二、六三、六四、六五、上九は、それぞれひっくり返った益卦の上九、九五、六四、六三、六二、初九にあたるのである。むしろ逆もそうである。

興味深いことに、損卦六五の爻辞は、

ある 或ひと之に十朋の亀を益う。違うこと克わ  
ず。元いに吉。

となっているのに対して、ひっくり返して向き合う益卦六二の爻辞は、

ある 或ひと之に十朋の亀を益う。違うこと克わ  
ず。永貞なれば吉。王用て帝に享す。吉。

となっており、「或益之十朋之亀、弗克違」（ある人からとてつもなく高価な亀を頂戴した）の十文字は完全に同文である。あたかも先ほど見たa列末尾の「兕」がひっくり返ってb列冒頭の「兕」になっているかのようである。

損卦と益卦が互いに「綜」の関係にあり、反

対卦をなしていることはつとに議論されてきたが、「綜」や「反対」が爻の次元においても認められることは、あまり注目されていないようである。

爻の意味を説く爻辞は、六十四卦が整う以前の筮辞（占筮のことば）の面影を残しているが、六十四卦が定まったあとに成立したと考えられる。ひっくり返った爻が反対の位置にいないが、まったく同じ爻辞を共有するということは、あるいは爻辞が成立する過程において、各々の爻がひっくり返しても向き合うように意識されていたことを示唆しているかもしれない。ただし、六十四卦の成立に関わるこの問題はこの小論の対象ではないので、しばらくおいておく。

さて、a列末尾の「兕」とb列冒頭の「兕」のあいだは、同じ「兕」でも、意味の継承と転換が認められることは、すでに見たとおりである。同様のことは損卦六五と益卦六二にも指摘できる。両爻は同じ爻辞を共有していても、損卦六五の場合は、上に居て下から益を受けるので亀を受け取る者は君主、益卦六二の場合は、下に居て上から益を受けるので亀を受け取る者は臣下である<sup>5)</sup>。

ところで、爻辞共有のほかに、損卦と益卦の他の爻のあいだにも、「下を損して上を益す」と「上を損して下に益す」をめぐって、回文のようなひっくり返りによる意味の継承と転換が認められる。以下試みに、向き合う二本の爻を一对として、爻辞を対置させながら検証してみる。

損卦初九、「事<sup>や</sup>を已めて過<sup>すみや</sup>かに往く。咎なし。酌<sup>く</sup>みてこれを損す」。

益卦上九、「これに益<sup>ま</sup>すことなし。或いはこれを撃<sup>う</sup>つ。心を立つること恆<sup>つね</sup>なし。凶」。

損卦の初九は、自分の仕事をやめて、速やかに上位の六四を助けに行く、だから咎めなし、

斟酌して自分を損<sup>へら</sup>すがよい、という。

これがひっくり返って益卦上九となると、誰も助けてくれる人がいない、それどころか攻撃されてしまいかねない、安住する恒常心がなく貪欲だからである、となる。

一方は上を助けに行く。一方は下の誰からも助けてもらえない。一方は咎めなし、一方は攻撃される危険をはらんでいる。同じ陽爻ながら、ひっくり返って位が反対になれば、意味するところも相反している。

損卦九二、「貞<sup>ただ</sup>しきに利あり。征<sup>ゆ</sup>けば凶。損<sup>そん</sup>せずしてこれを益<sup>ま</sup>す」。

益卦九五、「孚<sup>まこと</sup>ありて恵心<sup>けいしん</sup>あれば、問うことなくして元吉、孚<sup>げんきつ</sup>ありてわが徳を恵とす」。

損卦の九二は、中庸の道を守りつづけるとよい、盲進すれば危険、自らを損<sup>へら</sup>さずに上に益<sup>ま</sup>すことができる、という。

これがひっくり返って益卦の九五となると、誠意にみち、下を恵む心があれば、いうまでもなく大吉、天下の人も誠意をもって自分の徳に応え感謝するだろう、となる。

一方は臣下の位で、中庸の道を守るがよい。一方は君主の位で、天下の人々を恵む誠意に満ちあふれている。一方は無理に動いて上を助けようとする危険、一方は下々を恵まんとする志は文句なしの大吉。一方は自分を無理<sup>へら</sup>して損さずに上を助けるがよいとされる。一方は天下の人々はこぞって自分の徳に恩返ししようとする。

損卦六三、「さん<sup>さん</sup>人行<sup>いちにん</sup>けば一人<sup>そん</sup>を損<sup>へら</sup>す。一人行<sup>う</sup>けばその友を得」。

益卦六四、「中行<sup>ちゅうこう</sup>あれば、公<sup>こう</sup>に告げて従<sup>したが</sup>われん。用<sup>もち</sup>て依<sup>よ</sup>ることを為<sup>な</sup>し国<sup>こく</sup>を遷<sup>うつ</sup>すに利あり」。

損卦の六三は、陰の三人(六三、六四、六五)とも陽の一人(上九)に仕えようと連れ立っていけば、かえって陽に損<sup>へら</sup>を与える、一人(六三)で行けば、容れてもらえてその友を得る、という。

これがひっくり返って益卦の六四となると、中庸を守りつつ、公(九五)に告げれば、(下を益<sup>ま</sup>す)願い事を聞き入れてもらえるだろう、君主によりそって国を遷<sup>うつ</sup>すのによろしい、となる。

一方は陰爻の六三が一人で赴いていけば、陽爻の上九に友として受け入れてもらえて、陽爻の上九を益<sup>ま</sup>すだろう。一方は、陰爻の六四が陽爻の九五に訴えれば、天下を益<sup>ま</sup>す進言を採用してもらえるだろう。

損卦六四、「その疾<sup>やまい</sup>いを損<sup>そん</sup>す。使<sup>も</sup>し過<sup>すみや</sup>かなれば喜<sup>よろこ</sup>びあり。咎<sup>とが</sup>なし」。

益卦六三、「これに益<sup>ま</sup>す。凶事<sup>きょうじ</sup>に用<sup>もち</sup>うるに咎<sup>とが</sup>なし。中行<sup>ちゅうこう</sup>に孚<sup>まこと</sup>あり。公<sup>こう</sup>に告<sup>つ</sup>ぐるに圭<sup>けい</sup>を用<sup>もち</sup>てす」。

損卦の六四は、初九を恋慕する病を損<sup>へら</sup>す(治す)、自分を助けようとする初九を速やかに受け入れればめでたし、咎めなし、という。

これがひっくり返って益卦六三となると、災害などの凶事にあたって援助を乞うのは咎めを受けない、ただし中庸を守り誠意を示すこと、公に訴えるときは圭を用いてうやうやしくすること、となる。

一方は馳せ参じてくる下位の援助者(初九)を待ち遠しくて速やかに受け入れる。一方は緊急時に際して上位の公(六四)に援助を求める。

損卦上九、「損<sup>そん</sup>せずしてこれを益<sup>ま</sup>す。咎<sup>とが</sup>なし。貞<sup>ただ</sup>しければ吉にして、往<sup>い</sup>くところあるに利あり。臣<sup>しん</sup>を得るに家<sup>いえ</sup>なし」。

益卦初九、「用<sup>もち</sup>て大作<sup>たいさく</sup>を為<sup>な</sup>すに利あり。元

吉にして咎なし」。

損卦の上九は、自らを損<sup>へら</sup>さなくとも下に益すことができるから咎めなし、正道を守れば吉、このまま進めばよろしい、天下の人はひとしく服従してくれるだろう、という。

これがひっくり返って益卦の初九となると、大事業を興すのがよろしい、大吉、咎めなし、となる。

一方は「下を損して上を益す」の頂点におり、いよいよ「上を損して下に益す」に転換しようとしているのに際して、十分な余力があつて下に益すことができる。一方は「上を損して下に益す」の起点におり、六四も応じてくれるので、上からの援助を受けられる。どちらも大仕事を遂行するのにめでたしである。

以上、見てきたとおり、卦辞を共有する損卦六五と益卦六二のほかに、損卦と益卦の各爻にも回文的な向き合いが認められる。

このような爻の次元に見られる回文的な向き合いは、卦全体の「綜」——形と意味の反対——を織りなしているのである。

## 二、夬卦と姤卦にみる回文的構造

夬<sup>かい</sup>卦は、一陰が五陽の上に乗っかっており、姤<sup>こう</sup>卦は逆に一陰の上に五陽を乗せている。



夬



姤

夬の卦辞にいう。「夬は、王庭に揚ぐ。孚<sup>おうてい</sup>あつて号<sup>あやう</sup>ぶ、厲<sup>つ</sup>きことあり。告<sup>まこと</sup>ぐること邑<sup>まこと</sup>よりす。戒<sup>せう</sup>に即<sup>つ</sup>くに利あらず。往<sup>じやう</sup>くとあるに利あり」。

卦辞とはその卦全体の内容や主旨を説くものである。これによると、夬とは決断する、決ることである。五陽の上に乗っかっている陰は、小人や奸臣の象徴、それを排除するのに、まずは朝廷に彼らの罪を告発し暴くこと、そして誠意をもって天下に呼びかける。小人を決めるのは危険を伴うから、まず自分の領地を固めてか

らにせよ。しかし武力に訴えてはいけない。そうすれば向かうところに利がある。

要するに、この卦の焦点は君主が小人を退治することにある。

対して、姤の卦辞にいう。「姤は、女<sup>じよさか</sup>壮<sup>めと</sup>なり。用<sup>もつ</sup>て女<sup>じよ</sup>を取るなかれ」。

わずか一言だが、五人の男を相手にするこの女は不貞のうえ、相当なやり手だから、嫁として娶ってはいけない、という。

これに従えば、この卦の焦点は、不貞の女に対する処し方にあるようである。

君主の上にのさばる小人を断罪することと、不貞の女に近づかないこととは一見、損卦と益卦ほど明瞭な接点がないようにみえる。しかし本田濟がいうように、「夬を旁とする字、決、快、訣、缺、みな切り離れる感じを含む<sup>6)</sup>」。「夬は決れ離れることであつた。離れたもの必ず姤<sup>あ</sup>う。故に夬卦に姤卦が次ぐ（序卦伝<sup>7)</sup>」)。つまりここに引かれた「序卦伝」に従えば、夬卦と姤卦は、用いる「象」（表象、シンボル）こそ違うが、「決別」と「遭遇」を軸に相対しているものと言える。

これは両卦の象伝でも確認できる。

象に曰く、夬<sup>かい</sup>は決<sup>けつ</sup>なり。剛の柔を決するなり。（夬卦）

象に曰く、姤<sup>こう</sup>は、遇<sup>ぐう</sup>なり。柔剛<sup>じゅう</sup>に遇うなり。（姤卦）

しかもなによりも、この両卦にも、次に見るように、まったく同文の爻辞がひっくり返して向き合う爻どうしで共有されているのである。各々の爻辞をしばらく見てみる。

夬卦初九、「趾<sup>あし</sup>を前<sup>すす</sup>むるに壮<sup>さか</sup>なり。往<sup>ゆ</sup>いて勝たざるを咎となす」。

姤卦上九、「その角<sup>つの</sup>に姤<sup>あ</sup>う。吝<sup>りん</sup>なれど、咎なし」。

夬卦の初九は、<sup>あし</sup>趾に力がみなぎり、小人（上六の陰）の排除を目指して猛進しようとする、しかし位が低く力不足で往っても勝算なく失敗する、かえって咎めを受ける、という。

これがひっくり返って姤卦の上九となると、最上位に登りつめた陽爻は、わずか一本しかない初六の陰爻に遇おうにも遠く隔たりすぎてかなわない、無念もあるが、不貞の女や小人にはかえって遇わない方がよいので、咎めを受けない、となる。

一方は目標を目指して猛進しようとする。一方は目の前に目標すらみえない。一方はあえなく失敗するが、一方は無傷でいられる。

夬卦九二、「<sup>おそ</sup>惕<sup>さけ</sup>れて<sup>ぼ</sup>号<sup>や</sup>ぶ。莫<sup>つもの</sup>夜に戎あれども、<sup>うれ</sup>恤<sup>う</sup>るなかれ」。

姤卦九五、「<sup>き</sup>杞<sup>か</sup>を以て<sup>しょう</sup>瓜<sup>しょう</sup>を包む。章を含む。天より<sup>お</sup>隕<sup>う</sup>つることあり」。

夬卦の九二は、小人を退治するにあたって、真夜中の逆襲もあるのにそなえて警戒を呼びかける、万全の体制で臨むので憂慮することがない、という。

これがひっくり返って姤卦の九五となると、柳の籠で瓜を包むように不貞の女や小人を覆い被して悪さを未然に防ぐ、自らの美德も包み隠しているの、いずれ思わぬ出会いが訪れるだろう、となる。

一方は両軍対峙の臨場感や緊迫感にみちているが、一方は悠揚迫らずに構えている。一方は襲撃される恐れがあるが、一方は期せずして意中の人に遇えるかもしれない。一方は大声で叫ぶ。一方は自らの美德を包み隠す。

夬卦九三、「<sup>つらばね</sup>夬<sup>さか</sup>に<sup>かい</sup>壮<sup>かい</sup>ん<sup>かい</sup>なり。凶あり。君子は<sup>め</sup>夬<sup>め</sup>々<sup>め</sup>。独<sup>ひと</sup>り<sup>ひと</sup>行<sup>い</sup>きて<sup>い</sup>雨<sup>い</sup>に<sup>い</sup>遇<sup>い</sup>う。濡<sup>ぬ</sup>るが<sup>ぬ</sup>若<sup>わか</sup>く<sup>い</sup>慍<sup>い</sup>らるることあり。咎なし」。

姤卦九四、「<sup>ちゅうぼう</sup>包<sup>う</sup>に<sup>た</sup>魚<sup>う</sup>なし。起<sup>た</sup>てば凶」。

夬卦の九三は、小人を決ろうとする意気込みが顔中にみなぎれば凶、君子は決然たる態度で小人を決らねばならない、独りで果敢に向かっていけば、たとえいらぬ疑いをかけられて他の君子から白い目で見られても、ついに小人を断罪できるから咎めなし、という。

これがひっくり返って姤卦の九四となると、厨房に魚が消えた（九二にとられた）、つまり民が離れていった、ムキに取り返そうと争いを起こせば凶である、という。

一方は君子が決然たる態度で果敢に小人を征伐した。一方はとられたものをとり返すために争いを起こすなという警告である。

夬卦九四、「<sup>いさらい</sup>臀<sup>はだえ</sup>に<sup>し</sup>膚<sup>こと</sup>なし、その行くこと<sup>し</sup>次<sup>こと</sup>且<sup>こと</sup>たり。羊を牽<sup>ひ</sup>ければ<sup>し</sup>悔<sup>こと</sup>亡<sup>こと</sup>ぶ。言<sup>こと</sup>を聞<sup>こと</sup>くとも<sup>し</sup>信<sup>こと</sup>ぜず」。

姤卦九三、「<sup>いさらい</sup>臀<sup>はだえ</sup>に<sup>し</sup>膚<sup>こと</sup>なし、その行くこと<sup>し</sup>次<sup>こと</sup>且<sup>こと</sup>たり。厲<sup>あやう</sup>けれど<sup>あやう</sup>大<sup>あやう</sup>なる<sup>あやう</sup>咎<sup>あやう</sup>なし」。

「臀无膚。其行次且。」までは全くの同文である。

夬卦の九四は、いよいよ決ろうとするときに、尻の皮がむけて、ぎくしゃくして思うように前へ進めない、羊を牽くように他の陽爻（君子）の後についていけば後悔しなくてすむが、注意を聞いても信じようとしないだろう、という。

これがひっくり返って姤卦の九三となると、初六に遇おうにも、尻の皮がむけて、ぎくしゃくして思うように前へ進めない。しかし、不貞の女や小人に遇えば傷つくこともあるので遇わなくてよかった、となる。

一方は尻の皮がむけて歩くことも思うにまかせないながら、忠告をふりきって、小人征伐に猪突猛進しようとしている。一方は初六の女に遇おうという気持はあったが、ぎくしゃくして行動に移せなかった。一方は悔いが残るが、一方は危うかったものの踏みとどまった（姤卦九三の「象伝」に、「其行次且、行未牽也」とあ



るが、『周易程氏伝』はこれを、既に危ういことを知って改めた。故に大いなる咎めに至らなかった、と解釈している。「象伝」とは卦または爻についての解説）。

夬卦九五、「<sup>けんりくかいがい</sup>見陸夬々、<sup>ちゅうこう</sup>中行にして咎なし」。

姤卦九二、「<sup>ちゅうぼう</sup>包に魚あり。咎なし。<sup>ひん</sup>賓に利あらず」。

夬卦の九五は、君子はまるで雑草を断ち切るように決然と小人を排除する。位が正しくて中庸を守っているので、咎めを受けない、という。

これがひっくり返って姤卦の九二となると、厨房に魚（初六）があらわれた、咎めを受けないが、招かざる他人のものなので、賓客に振る舞うわけにはいかない、となる。

一方は小人を思い切り排除した。一方は初六の近くにいて遇っているながら実害を受けていないが、不貞の女を他の君子に紹介するわけにはいかない。

夬卦上六、「<sup>さけ</sup>号ぶことなし。<sup>つい</sup>終に凶あり」。

姤卦初六、「<sup>きんじ</sup>金柅に繫ぐ。<sup>ただ</sup>貞しくして吉。往くところあれば、凶を見る。<sup>あいにし</sup>羸豕孚に蹢躅たり」。

夬卦の上六は、五人の君子の上に乗っかっている小人は決られる運命にある、叫びわめいてもついに逃れられない、という。

これがひっくり返って姤卦の初六となると、金でつくった車止めにしっかりつなぎ止めよ、そのままいけば吉だが、軽率に進むとやせ細った豚がむやみに跳ね回るように危険だ、となる。

一方は君子によって断罪される運命だが、一方はブレーキをかければまだ難を逃れられる。一方はついに断罪される。一方はやせ細った豚のように飛び回って五人の君子に被害を蒙らせようとしている。

以上、互いにひっくり返って向き合った六対

の爻を考察してきた。まったく同文の爻辞が共有されることはここでも認められた。それも含めて、六対の爻は、「決別」と「遭遇」（いずれも君子対小人）を軸に回文的に意味の継承と転換をしつつ相対しているのである。

### 三、既済卦と未済卦にみる回文的構造

六十四卦のしんがりをつとめる既済卦と未済卦は、「綜」のペアであるとともに、「錯」のペアでもある。



既済



未済

「済」は「なる」と訓じ、完成を意味する。一方、「水を渡る」という原義ももつ。このペアは水を渡る「象」を共有しつつ、完成と未完成を軸に向き合っているものである。しばらく卦辞を見ていく。

既済卦初九、「<sup>わ</sup>其の輪を曳く。<sup>ひ</sup>其の尾を濡らす。咎なし」。

未済卦上九、「<sup>いんしゅ</sup>飲酒に孚あり。咎なし。其の首を濡らすときは、<sup>まこと</sup>孚あること<sup>こころ</sup>是に失わる」。

既済卦の初九は、川を渡ろうとする車の輪を曳きもどし、あたかも狐が川を渡ろうとして尾を濡らして逡巡するように、軽々しく進もうとしない、よって咎めを受けない、という。

これがひっくり返って未済卦の上九となると、未済の極に登りつめやがて既済に転じようとする際の賢人君子（上九）は、無理に努力しようとせずに、有能な人にまかせて自ら悠然と酒を飲んで天命を待っている、それは大いにけっこうなことで、咎めを受けないが、ただし節度のある飲酒が歓楽にふけってしまうようなことになり度が過ぎると、狐が川を渡るのに頭まで濡らしてしまう（危うい）ように、人を信頼し天命を待つ誠意があっても正道からそれてしまい

かねない、となる。

一方はいよいよ川を渡ろうとしている。一方はまさに川を渡りきろうとしている。一方は狐が尾を濡らして慎重になり大事に至らない。一方は一步間違えば狐が首を濡らして溺れてしまいかねない。

狐が濡れる「象」を共有しながら、既済卦の始まりでは尾を濡らし、ひっくり返して未済卦の終わりでは首を濡らしている。あたかも a 列末尾の述語たる「兕」がひっくり返って b 列の頭に立ち主語に変わったように、狐の「象」は回文的に向き合っている。

既済卦六二、「婦<sup>ふ</sup>その<sup>ふつ</sup>蓍<sup>うしな</sup>を<sup>お</sup>喪<sup>え</sup>う。逐<sup>お</sup>うな<sup>か</sup>れ七日にして得<sup>え</sup>ん」。

未済卦六五、「貞<sup>ただ</sup>しくして吉<sup>くわい</sup>。悔<sup>ひかり</sup>なし。君子<sup>まこと</sup>の光<sup>ひかり</sup>あり。孚<sup>まこと</sup>あり。吉なり」。

既済卦の六二は、婦人は車に乗る際に顔を隠す蓍（車の蔽い）を紛失したが、あわてて追っかけて探さなくても七日もすれば戻ってくるだろう、という。

これがひっくり返って未済卦の六五となると、有能な臣下を信頼する志を貫けば吉、悔いはない、君子としての徳の光もあり誠意もあるから、吉、となる。

一方は光の「象」（六二は火を意味する離卦 ☲ の真ん中で主である）を持ちながら、婦人が車の蔽いをなくして外出できないように、光を放つ機会に恵まれない。一方は同じく離卦の真ん中でありながら、君位にいたので、何者にも遮られずに輝いている。一方の光は潜在的である。一方の光は顕在的である。

七日して戻ってくることにについて、本田済は「七日とは、清の王夫之によれば、一卦は六爻から成るので、一爻を一日とすればこの卦の時が一巡するのが七日である<sup>8)</sup>」、と解いている。興味深い説だが、一巡してもとの六二に戻ってくるといよりも、一巡して逆さまになった未

済卦の六五に転じたと読み直したい。そうすれば、とじ定められた光は、七日一巡すれば輝く光になる。二爻のあいだに見えざる噛み合いや循環が見えてくる。ここにまさに、われわれが光を当てようとする、爻の次元における回文的関係があるのである。

既済卦九三、「高<sup>こう</sup>宗<sup>そう</sup>鬼<sup>き</sup>方<sup>ほう</sup>を<sup>う</sup>伐<sup>う</sup>つ。三年にしてこれに克<sup>か</sup>つ。小人<sup>ちようじん</sup>は用<sup>もち</sup>うるな<sup>な</sup>かれ」。

未済卦九四、「貞<sup>ただ</sup>しければ吉<sup>くわい</sup>にして、悔<sup>くわい</sup>亡<sup>くわい</sup>ぶ。震<sup>うご</sup>いて用<sup>もち</sup>て鬼<sup>き</sup>方<sup>ほう</sup>を<sup>う</sup>伐<sup>う</sup>つ。三年にして大国<sup>おおくくに</sup>に賞<sup>しょう</sup>せらるることあり」。

既済卦の九三は、高宗（殷王武丁）は蛮族の鬼方を討伐して、三年もかかってようやくこれに克った、このような戦には小人は用いてはいけない、という。

これがひっくり返って未済卦の九四となると、つとめて正道を守れば吉、位の不正による悔いもなくなる、獅子奮迅の勢いで鬼方を討伐せよ、三年後には大国に封ぜられる褒美をもらうだろう、となる。

一方は既済、すでになされた討伐。一方は未済、これから行う討伐。一方は討伐の主語は高宗、一方は討伐の主語は褒美をもらう臣下。

ここでも「伐鬼方、三年」という爻辞は、意味の継承と転換をしつつ、向き合った両爻で共有されている。

既済卦六四、「繻<sup>も</sup>るに衣<sup>い</sup>袂<sup>じょ</sup>あり。終<sup>しゆう</sup>日<sup>じつ</sup>戒<sup>けい</sup>む」。

未済卦六三、「未<sup>いま</sup>だ<sup>な</sup>済<sup>な</sup>らず。征<sup>ゆ</sup>けば凶<sup>たい</sup>。大<sup>たい</sup>川<sup>せん</sup>を渉<sup>わた</sup>るに利<sup>り</sup>あり」。

既済卦の六四は、船底の浸水に備えてぼろぎれを用意して四六時中警戒している、という。

これがひっくり返って未済卦の六三となると、事はいまだ済らず、むやみに征けば（あるいは



朱子『周易本義』にしたがえば、陸を征けば凶だが、大川を渉るには有利である、となる。

一方は船底浸水の恐れがある。一方は大川を渉るのに問題がない。一方は船で川を渉るのに危険をはらんでいる。一方は事がいまだ済らない不安定さを抱えながらも、状況打開のために思い切って川を渡った方がよいとされる。

既濟卦九五、「東鄰<sup>とうりん</sup>牛を殺すは、西鄰<sup>せいりん</sup>の禴<sup>やく</sup>祭<sup>さい</sup>に如かず。実に其の福を受く」。

未濟卦九二、「其の輪<sup>わ</sup>を曳<sup>ひ</sup>く、貞<sup>ただ</sup>しくして吉」。

既濟卦の九五は、東隣で牛を殺して盛大な祭りを行うものの、西隣の質素でもまごころをこめた祭りには及ばない、西隣がほんとうに福を受けるだろう、という。

これがひっくり返って未濟卦の九二となると、川を渡ろうとする車の輪を曳きもどし、軽々しく進もうとしない。このように自重していれば吉、となる。

一方は君位におり、天下泰平にあたって、誠意をもって神を祀れば、大いに福を受けるだろう。一方は弱い君主（六五）を輔佐する臣下の位で、天下泰平がいまだならぬ時にあたって、慎重に君主を支えることが求められる。

既濟卦上六、「其の首<sup>こうべ</sup>を濡らす。厲<sup>あや</sup>うし」。

未濟卦初六、「其の尾<sup>りん</sup>を濡らす。吝<sup>りん</sup>なり」。

既濟卦の上六は、狐は川を渡って頭までずぶ濡れになってしまった、危うい、という。

これがひっくり返って未濟卦の初六となると、狐は無謀にも川を渡ろうとして尾を濡らしてしまう、やっかいである、となる。

既濟卦初九と未濟卦上九にひきつづき、ここでも卦の終わりと始まりにおいて、「其の首を濡らす」と「其の尾を濡らす」とが相対してい

る。

狐が濡れる「象」を共有しながら、今度は先ほど逆に、既濟卦の終わりでは首を濡らし、ひっくり返して未濟卦の始まりでは尾を濡らしている。a列末尾の述語「兎」がひっくり返ってb列の頭に立ち主語に変わったように、狐の「象」はここで再び回文的に向き合っているのである。

以上、既濟卦と未濟卦の各爻を「綜」の視点から検討してきた。既濟卦九三と未濟卦九四が同文の爻辞を共有しているのははじめ、逆さまになったそれぞれの爻のペアにおいて「象」の継承や意味の転換が確認された。のみならず、両卦の始まりと終わりで、狐の首が濡れるのと尾が濡れるのが、文字通り首尾よくかみ合っているのは、いかにも回文的である。

さらにこのペアの興味深いことに、陰陽が逆になる「錯」の形で、爻辞の共有が認められるのである。

既濟卦初九と未濟卦初六は、「其の尾を濡らす」、既濟卦上六と未濟卦上九は、「其の首を濡らす」、それぞれまったく同文の爻辞が用いられている。そこでも意味の継承と転換が起きていることは、各爻の検討で見たとおりである。

「綜」は逆さまになった回文なら、「錯」は対句的な回文とも言える。対句も広い意味での回文であることは、以前拙文で触れたが、これについてはさらに稿を改めて論じたいと思う。

なおこのペアには、以上にみた既濟卦九三と未濟卦九四における爻辞の共有のほか、既濟卦初九と未濟卦九二のあいだにも、「曳其輪」（其の輪を曳く）という三文字の爻辞の共有がみられる。既濟卦初九と未濟卦九二とは回文的な向き合いの関係にない。これについて、『周易折中』は、輪を曳いて慎むのは既済と同じでありながら、ひとつ爻がずれているのは、（既済と未済の）時が違うからだ、という趣旨の解釈をしている。公田連太郎は、未濟卦九二が初六の「軽々しく済りて尾を濡らすに懲る。故に其輪を曳きて、進まず」という『周易述義』を引いている<sup>9)</sup>。三浦國雄は、既済初九「曳其輪、濡

其尾」を未済卦初六と九二に振り分けている<sup>10)</sup>、と説明している。いずれも既済卦初九と関連づけて、しかも未済卦九二を初六とひとつづきで解釈している。

#### 四、屯卦と蒙卦にみる回文的構造

屯卦は純陽の乾卦と純陰の坤卦の次に置かれ、「象伝」のいうように剛と柔が始めて交わった卦だからか、「象」に嫁入りを多用している。一方蒙卦は「象」に啓蒙を主として用いる。女も蒙も属性が陰なので、一見異なる「象」を用いながら、屯卦と蒙卦は「綜」のペアを組んでいる。



屯



蒙

しばらく爻辞を見ていく。

屯卦初九、「磐桓<sup>ばん かん</sup>す。貞<sup>お</sup>に居<sup>き</sup>るに利あり。侯を建つるに利あり」。

蒙卦上九、「蒙<sup>う</sup>を撃<sup>あ</sup>つ。寇<sup>あだ</sup>をなすに利あらず、寇<sup>あだ</sup>を禦<sup>おほ</sup>ぐに利あり」。

屯卦の初九は、陰陽交わったばかりの、天地草創、無智蒙昧の時にあたって、進もうにも進みにくく躊躇している、ただし正道を貫ければ利があり、君主を擁立し国を建てるのに利がある、という。

これがひっくり返って蒙卦の上九となると、蒙昧を退治するのに、強引に排撃するのはよろしからず、むしろ外敵の侵入を防ぐように、「外からの悪の誘惑を防いで、天性の純真を失わないようにするがよい<sup>11)</sup>」、となる。

一方は国作り、君主を擁立して国を建てるのに利がある。一方はテリトリーの防禦、外敵侵入を防ぐのに利がある。

そして屯卦初九の「象伝」は、「貴<sup>き</sup>を以て賤<sup>けん</sup>に下る、大いに民を得るなり」、高貴な身分の方が（初九）が社会の底辺に下ってきて、大い

に民心を得ているといい、蒙卦上九の「象伝」は、「上下順なるなり」、上と下が意思疎通し、なごやかになる、という。二本の爻は、上下相通じる、という「象」も共有しているのである。

屯卦六二、「屯<sup>ちゆん</sup>如<sup>じよ</sup>たり。遭<sup>てん</sup>如<sup>じよ</sup>たり。乗<sup>じよう</sup>馬<sup>ば</sup>班<sup>はん</sup>如<sup>じよ</sup>たり。寇<sup>あだ</sup>するにあらず、婚<sup>こん</sup>媾<sup>こう</sup>せんとす。女子<sup>てい</sup>貞<sup>じ</sup>にして字<sup>すなわ</sup>せず。十年<sup>じ</sup>にして乃<sup>し</sup>ち字<sup>す</sup>す」。

蒙卦六五、「童蒙、吉なり」。

屯卦の六二は、婚約者（九五）のところへ赴こうとしても、行きつ戻りつして、馬車が遅々として進まない、近所の男（初九）がつきまといているからだ、ただしその男は強引に奪おうとするものではなく、プロポーズしようとしているのである、娘は初志を貫き許さない、十年後にようやく念願の人と結ばれる、という。

これがひっくり返って蒙卦の六五となると、幼児のように蒙昧ながら、尊い地位から下に降りて師（九二）の教えをうやうやしく乞う、純真を失っていないから吉だ、となる。

一方はさまざまな障害を乗り越えても婚約者のところへ赴こうとする。一方は啓蒙の師を訪ねるために尊い地位から降りるのもやぶさかではない。相手が婚約者と師のちがいがあゝるものの、どちらも純真を保っている。

屯卦六三、「鹿<sup>しか</sup>に即<sup>つ</sup>くに虞<sup>ぐ</sup>なし。ただ林中<sup>いん</sup>に入る。君子<sup>くんし</sup>ほとんど舍<sup>す</sup>つるに如<sup>し</sup>かず。往<sup>りん</sup>けば吝<sup>しん</sup>」。

蒙卦六四、「蒙<sup>くろ</sup>に困<sup>りん</sup>しむ、吝<sup>しん</sup>なり」。

屯卦の六三は、案内人もなく鹿を追いかけて林の奥深くへ入ってしまう、君子は引き返すが、むやみに往けば厄介なことになる、という。

これがひっくり返って蒙卦の六四となると、二陰にはさまれた六四は師の教えに接することができず、蒙昧の中にとじ込められて、困った

ことになっている、となる。

一方は森の闇に陥ってしまう。一方は蒙昧の闇に陥ってしまう。どちらも厄介である。

屯卦六四、「乗馬班如<sup>じょうばはんじょ</sup>たり。婚媾<sup>こんこう</sup>を求む。往けば吉、利あらざるなし」。

蒙卦六三、「女<sup>じょ</sup>を取るに用<sup>めと</sup>うるなかれ。金<sup>きん</sup>夫<sup>ふ</sup>を見て、躬<sup>み</sup>を有<sup>たも</sup>たず。利するところなし」。

屯卦の六四は、女（六四）は男（初九）に応じようとして赴く、はじめは六二の邪魔を恐れてためらいもあって馬車が遅々として進まないが、六二が初九に従おうとしないから、六四はこの婚姻を求めて往くときと結ばれる、何ら不利はない、という。

これがひっくり返って蒙卦の六三となると、この女を娶るな、金持ちの男を見るとすぐなびくものだ、嫁にして何もいいことなし、となる。

一方は女は結婚を求めて往けばきつと受け入れてもらえる。一方はこの女を嫁にしてはいけない。一方はこの婚姻に何ら不利はない。一方はこの女を嫁にしたら何もいいことなし。鮮やかな「反対」である。

屯卦九五、「その膏<sup>あぶら</sup>を屯<sup>ちゆん</sup>す。小貞は吉、大貞は凶」。

蒙卦九二、「蒙<sup>もう</sup>を包<sup>つつ</sup>む、吉なり。婦<sup>つま</sup>を納<sup>い</sup>るに、吉なり。子、家を克<sup>よく</sup>くす」。

屯卦の九五は、婚礼のために肉をたくわえる<sup>12)</sup>、ただしそれは六二のためのものであって（『周易正義』）、広く天下一般に施そうとするものではない（「象伝」）、この君主（九五）は、小さいことを行うなら吉だが、大きいことを行おうとすると凶だ、という。

これがひっくり返って蒙卦の九二となると、蒙昧を包容するから吉、妻（六五）を迎え入れ

るのも吉、親の代わりに子が家をよく治めている、となる。

一方は婚礼のためにこつこつと準備を進めている。一方はめでたく妻を迎え入れている。一方は（九五）君主の位にいなが天下に施そうとしないから凶だ。一方はそのような義務のない九二は、多くの陰に囲まれているものの、それらをよく包容し我が家をよく治めているから吉である。

ここで注目すべきなのは、蒙を発く「象」を主として用いている蒙卦がこの六三と九二において、屯卦の嫁入りの「象」を取り入れたのである。「童蒙」と「嫁入り」がここで交わり、回文的にいつそう強く結ばれるようになった。

屯卦上六、「乗馬班如<sup>じょうばはんじょ</sup>たり、泣血<sup>きゅうけつ</sup>漣<sup>れん</sup>如<sup>じょ</sup>たり」。

蒙卦初六、「蒙<sup>ひら</sup>を発<sup>もつ</sup>く。用<sup>もつ</sup>て人を刑<sup>し</sup>し、桎梏<sup>しこく</sup>を説<sup>と</sup>くに利あり。以て往<sup>りん</sup>けば吝」。

屯卦の上六は、馬車に乗って出かけたが、だれも応じてくれようとする人がいないから、どこに向かっていいかもわからず、馬車は遅々として進まない、あまりの寂しさに、血の涙がとめどもなく流れる、という。

これがひっくり返って蒙卦の初六となると、蒙を啓くのに刑罰を用いるがよい、手枷足枷をはめられるような犯罪に走らせないためによい、ただし厳罰ばかりだと長く続かず、よろしからず、となる。

一方は行くあてもなくさまよっている。一方はいよいよ蒙が啓かれようとしている。一方は血の涙、一方は刑罰や桎梏の表象が踊る。

以上、屯卦と蒙卦の爻辞を検討してきた。一見異なる「象」を用いながら、両卦はときに相手の「象」を取り入れたり、ときに向かい合う爻に真逆の爻辞が見られたりして、しっかり回文的に向き合っているのである。とりわけ屯卦の六四と蒙卦における六三の絶妙な反転がすこぶ興味深い。回文の傑作とも言える。

## 五、謙卦と豫卦にみる回文的構造

謙卦は謙遜を、豫卦は和樂、楽しみを「象」とするが、謙遜でいれば必ず豫しい(「序卦伝」)から、それを軸に謙卦と豫卦は「綜」のペアをなす。



謙



豫

謙卦初六、「謙々たる君子。用て大川を渉る、吉なり」。

豫卦上六、「冥豫す。成るも渝ることあり。咎なし」。

謙卦の初六は、謙遜この上もない君子は、たとえ大川を渉るような冒険に出ても乗り切れる、吉、という。

これがひっくり返って豫卦の上六となると、歓楽に溺れて目がくらむ、しかし悔い改めることができれば咎めがない、となる。

一方は謙虚なうえに謙虚である。一方は快楽に耽ってしまっている。一方はどんな冒険に打って出ても吉。一方はブレーキをかけて悔い改めることを求められている。

謙卦六二、「鳴謙す。貞にして吉なり」。

豫卦六五、「貞にして疾む。恆に死せず」。

謙卦の六二は、謙虚の名声が天下にとどろいており、このまま保持すれば吉、という。

これがひっくり返って豫卦の六五となると、君位にいながら快楽に耽って憂いを忘れている、重病人のような暗君である、けれども慎めばすぐに滅びることはない、となる。

一方は謙虚の名声を天下にとどろかせている。一方は快楽に溺れている暗君。一方は吉。一方はすぐには滅びなくても氣息奄々。

謙卦九三、「勞謙たる君子。終日あり吉」。

豫卦九四、「由豫す。大いに得るあり。疑うなかれ、朋盍簪る」。

謙卦の九三は、献身的で謙虚な君子は、万民から心服される(「象伝」)、有終の美を飾ることができるから吉、という。

これがひっくり返って豫卦の九四となると、君主を輔佐して天下に楽しみをもたらしてくれる中心人物である、その志は大いに実現されるだろう、疑うことなかれ、同志が馳せ参じて力を貸してくれるだろう、となる。

一方は天下のために献身的に働きますでに功勞を建てている。一方はこれから天下に楽しみをもたらす志を実現しようとしている。一方は万民から慕われている。一方は友朋から信頼されている。

謙卦六四、「利あらざるなし、謙を撝え」。

豫卦六三、「盱豫す。悔ゆ。遅ければ悔あり」。

謙卦の六四は、上に対しても下に対しても謙虚の美德を発揮しているから、万事順調である、という。

これがひっくり返って豫卦の六三となると、上(九四)にへつらい歓楽を求める、やがて後悔するだろう、悔い改めるのが遅ければもっと悔いを残すだろう、となる。

一方は上下問わず謙虚に接している。一方は上目遣いで上のご機嫌をとる。一方は何もかも順調である。一方は大きな悔いを残すかも。

謙卦六五、「富まず、その鄰と以にす。て侵伐するに利あり。利あらざるなし」。

豫卦六二、「石に介たり。日を終えず。貞にして吉なり」。

謙卦の六五は、富ではなく徳で隣国を従わせる、帰服しない傲慢な国があれば、これを征伐するがよい、万事順調であろう、という。

これがひっくり返って豫卦の六二となると、正道を守る意志が石の如く固く（上も下も歓楽に耽っている中唯一道を外れていない）、歓楽に溺れる危うさを一日を終えないうちに悟ることができる、このまま保持すれば吉である、となる。

一方はほとんどの国が徳のある国になついている中、一部の従わない国がある。一方はほとんどの人が歓楽に溺れている中、一人だけ道を外れていない。一方は傲慢な国を征伐しようとする。一方は傲慢にならないようその日のうちに歓楽に溺れる芽を摘む。どちらもめでたしである。

謙卦上六、「<sup>めいけん</sup>鳴謙す。<sup>もつ</sup>用て師を行、<sup>いくさ</sup>邑国<sup>や</sup>を征するに利あり」。

豫卦初六、「<sup>めいよ</sup>鳴豫す。凶なり」。

謙卦の上六は、謙虚の名声が天下にとどろいている、<sup>いくさ</sup>戦を起す力も地位もないものの、近隣の小国を征伐するならよい、という。

これがひっくり返って豫卦の初六となると、歓楽に耽る喜びを得意げに声高らかに吹聴して自慢する、凶である、となる。

一方は謙虚の名声をとどろかせている。一方は歓楽に耽る喜びを吹聴する。一方は謙虚の名声がくちづてで広がる。一方は自慢話を一人でべらべらしゃべる。

『周易折中』に龔煥の説を引いて、豫の初六は即ち謙の上六の反対だ、という。まさにその通りである。

謙卦の六二にも「鳴謙」があるので、上六のそれは「冥謙」の誤りではないかという説もあるが、謙卦と豫卦が「綜」のペアであり、われわれがここまで考察してきたように、爻辞もひっくり返して噛み合っていることを考慮するとその説はあたらないだろう。

以上、謙卦と豫卦を検討してきた。『周易折中』のいうように謙卦の上六と豫卦の初六が向き合っているのみならず、回文的な噛み合いが六爻のすべてに及んでいることが認められた。

## 六、臨卦と觀卦にみる回文的構造

「臨」は上から下を見下ろす、「觀」は下から上を仰ぎ見る。臨卦と觀卦は互いに見る関係にあるペアである。



臨



觀

臨卦初九、「<sup>かん</sup>咸<sup>のぞ</sup>じて臨む、貞にして吉なり」。

觀卦上九、「<sup>せい</sup>その生<sup>み</sup>を觀る。君子なるときは咎なし」。

臨卦の初九は、上（六四）に感應して、その信頼を得て、民を教え導く、正しくて吉である、という。

これがひっくり返って觀卦の上九となると、君位（九五）のさらに上に登りつめた君子は、民に仰ぎ見られる、君子の徳を保てば吉である、となる。

一方は民を教え導く。一方は民に仰ぎ見られる。

臨卦九二、「<sup>かん</sup>咸<sup>せい</sup>じて臨む、吉にして利あらざるなし」。

觀卦九五、「<sup>せい</sup>我が生<sup>せい</sup>を觀る。君子なるときは咎なし」。

臨卦の九二は、君主（六五）に感應して、その信頼を得て、民を教え導く、吉にして万事順調である、という。

これがひっくり返って觀卦の九五となると、君主は我が身をふりかえり自省する、君子にふさわしければ咎めを受けない、となる。



一方は君主の力を借りて民を教え導く。一方は君主自ら我が身を自省する。

臨卦六三、「甘んじて臨む。利するところなし。既にこれを憂うれば、咎なし」。

観卦六四、「国の光を觀る。用て王に賓たるに利あり」。

臨卦の六三は、佞臣が巧みに言葉を操って民の上に立つ、うまくゆくはずがない、ただし過ちを恐れて自戒すれば咎めを免れる、という。

これがひっくり返って観卦の六四となると、王国の輝くばかりの泰平や賑わいを觀る。招かれて王に仕えるのによい、となる。

一方は佞臣が民の上に立っている。一方は輝くばかりに国勢が盛んである。一方は佞臣が君主のもとにいる。一方は志をもつ人が王に仕えようと志願する。

臨卦六四、「至りて臨む、咎なし」。

観卦六三、「我が生を觀て進退す」。

臨卦の六四は、もっとも優れた方法で民を教え導く、咎めはない、という。

これがひっくり返って観卦の六三となると、我が身をふりかえり自省し、進退を決断する、となる。

一方は最善を尽くして民を教え導く。一方は我が身を反省して出处進退を決める。

臨卦六五、「知あつて臨む、大君の宜なり。吉」。

観卦六二、「闚觀す。女貞に利あり」。

臨卦の六五は、智慧で民を教え導く、まことに大君にふさわしい、吉、という。

これがひっくり返って観卦の六二となると、

穴や隙間から覗き觀る、女子にはよい、となる。

一方は統治の智慧を心得た君主が臣下を信頼して民を教え導く。一方は外出できない女子が窓の隙間から輝かしい君主（九五）を覗き込む。一方はそうにゆったりと構えるのは大君にふさわしい。一方は女子ならいいが、隙間から覗き觀るやり方は男子として恥ずかしい（「象伝」）。

臨卦上六、「臨むに敦し。吉にして咎なし」。

観卦初六、「童觀す。小人は咎なし。君子は吝」。

臨卦の上六は、暖かく手厚く民を教え導く、吉で咎めを受けない、という。

これがひっくり返って観卦の初六となると、童子がものを觀るように視野が狭い、小人なら咎めを受けないが、君子としては恥をかく、となる。

一方は相手を暖かく包容するようにやさしく教え導く。一方は幼い童子のように仰ぎ見る。一方は君子として褒められる。一方は君子として恥をかく。

以上、臨卦と観卦を考察してきた。「見下ろす」「仰ぎ見る」、「君子が見る」と「女子・童子が見る」などの「象」が、ひっくり返した爻で絡み合って、意味の継承と転換をなし遂げていることが検証できた。

## 七、師卦と比卦にみる回文的構造

師卦の内卦（卦の下半分、下卦ともいう）は坎つまり水☵、外卦（卦の上半分、上卦ともいう）は坤つまり地☷である。比卦はその反対。ひっくり返しても、たとえば臨卦と観卦とちがって、卦を構成する水と地は変わらず、上下転倒するのみである。



師



比

「象伝」にいう。「地中に水あるは師なり」、「地上に水あるは比なり」。すなわち、水が下にある場合、「水は地の外に出ることはない。同様に、兵は農のなかにあって不離である。そこでこの卦は軍隊を象徴する」。水が上にある場合、「地上に水を撒けば、水は地と比し密着して、その間に隙がない。だから比と名付けた<sup>13)</sup>」。

この水と地の上下転倒は卦の意味に对照をもたらすのみならず、爻辞の次元にも向き合いを生んでいる。

師卦初六、「師出ずるに律を以てす、臧からざれば凶」。

比卦上六、「これに比する、首たることなし、凶」。

師卦の初六は、戦の出陣にあたって規律を厳しくせよ。規律がよくなければ凶、という。

これがひっくり返って比卦の上六となると、下に親しもうとしても首がない、首領としての徳がないから誰もついてこない、凶、となる。

一方は規律を厳しくして強力な統率力を發揮する。一方は人の上に立っているのに統率力がない。

師卦九二、「師中にあり。吉にして咎なし。王三たび命を錫う」。

比卦九五、「比を顯らかにす。王用いて三驅して前禽を失す。邑人誠めず。吉」

師卦の九二は、軍のうちにあって上下の信頼が厚い、吉にして咎めなし、王は三たびも褒美を賜る、という。

これがひっくり返って比卦の九五となると、人に親しむのに私心をはさまない、王が狩りをするときは、囲いの前面を開いておき三方からのみ駆り立てて逃げていくものを追わない、このような王には村人すら警戒心を抱かない、吉、

となる。

一方は、兵卒からも王様からも信頼される將軍。一方は万民が安心してついていく王。信頼という表象が共有されている。「三」は信頼の度合い（三たび褒美を下賜される）と信頼の理由（三方からのみ駆り立てる）を示しつつ繰り返されている。

師卦六三、「師或いは戸を興う。凶なり」。

比卦六四、「外これに比す、貞吉」。

師卦の六三は、戦になれば大敗して屍を車に載せて帰ってくるだろう、凶、という。

これがひっくり返って比卦の六四となると、賢明にも君主に親しみ従う、正しく吉である、となる。

一方は自らの力や立ち位置（陰爻にして陽位にあり「不正」のうえ、上に応じてくれる陽爻がなく、下に陽爻に乗っかっている）をわきまえず盲進しようとする。一方は自らの力や立ち位置（陰爻にして陰位にあり「正」、四と初は本来応じるべきところだったが、ともに陰爻で応じない）をよくわきまえて、自分より上の君主（九五）に親しみ従おうとする。当然一方は凶で、一方は吉である。

師卦六四、「師左りに次る、咎なし」。

比卦六三、「これに比する、人にあらず」。

師卦の六四は、自らの力をわきまえて安全な場所に止まっている、咎めがない、という。

これがひっくり返って比卦の六三となると、親しもうとしてもまわりは悪人ばかり、となる。

一方は自らの力や立ち位置（陰で力不足のうえ、下に応じてくれるものもないが、陰位にあり「正」）をわきまえて、盲進しようとせず、安全な場所に兵を止めているので危うきなし。一方は陰爻で陽位にいるから「不正」のうえ、四と二の陰に囲まれており、仰いでも本来応じ

るべきところの<sup>じょう</sup>陰で応じてくれず、まさに  
八方ふさがり、まわりは悪人ばかりで危険である。

師卦六五、「<sup>た</sup>田に<sup>きん</sup>禽あり。<sup>しつげん</sup>執言に利あり。  
<sup>ちやう</sup>咎なし。<sup>し</sup>長子師を<sup>ひき</sup>帥ゆ。<sup>てい</sup>弟子  
<sup>かばね</sup>戸を<sup>にな</sup>興う。貞なるも凶」。

比卦六二、「<sup>ひ</sup>これに<sup>うち</sup>比すること<sup>てい</sup>内よりす。  
貞にして吉なり」。

師卦の六五は、田畑に獣が侵入してきた、それを捕らえるがよい、咎めを受けない、ただし有能な人を将軍にあてることだ、小人をあてると、大敗して屍を車に載せて帰ってくるだろうから凶、という。

これがひっくり返って比卦の六二となると、自ら積極的に君主（九五）に近づき親しもうとする、正しくて吉である、となる。

一方は君主。一方は臣下。一方は侵略者が現れたので応戦せざるをえず、受身である。一方は自ら君主に仕えようと決意するので主体性をもっている。一方は凶が潜んでいる。一方はめでたい。

師卦上六、「<sup>たいくんめい</sup>大君命あり。国を開き<sup>ひら</sup>家を<sup>う</sup>承く。小人は用うるなかれ」。

比卦初六、「<sup>まこと</sup>孚ありてこれに<sup>ひ</sup>比す、咎なし。  
<sup>まこと</sup>孚ありて<sup>ほとぎ</sup>缶に<sup>み</sup>盈つれば、<sup>ついで</sup>終に<sup>きた</sup>来りて他の吉あり」。

師卦の上六、戦に勝って君主は論功行賞する命を下す、功労者を諸侯に封じたり、卿大夫に任命したりする、ただし小人は重用してはならない、という。

これがひっくり返って比卦の初六となると、まごころでもって君主（九五）に親しむから咎めなし、君主が酒甕に満ちあふれるほどのまごころを込めていれば、遙か遠方（初六）よりも人々がついてきて思わぬめでたいことがあるだ

ろう、となる。

一方は君主が大いに論功行賞する。一方は遠方の人々も君主のまごころに應えて馳せ参じようとする。一方は論功行賞の陰にまごころのない小人の顔がちらつく。一方は君主のまごころに感化されて遠方の人々もまごころで親しもうとする。

以上、師卦と比卦を検討してきた。軍隊の動かし方と人（君主や下々）への親しみ方、それぞれの「象」が異なりながら、ひっくり返した六本の爻が互いに噛み合っていることは認められた。

### むすび

卦の形が互いに上下反対になる「綜」卦は、左下のようにも表示される。



a 夫  
↓ 憶  
妻  
兮  
父  
憶 ↑  
児 b

本稿「はじめに」のa列とb列に並べた回文もそもそも一列だった。それを横に対置してみると、師卦の始まり（初六）が比卦の終わり（上六）であることが視覚的にいっそうわかりやすく、反対二卦の一体感もいっそう際立つ。

回文的に見て比卦の初六がひっくり返れば師卦の上六になるのだが、両者のあいだにはたしてa列の「児」とb列の「児」との関係が認められるのか、比卦の初六と師卦の上六のあいだに、意味の継承と転換がはたして存在するのか、というのは本稿の問題提起だったが、ここまで見てきた七組の「綜」卦に限って言えば、四十二対、計八十四爻の爻辞を考察してきた結果、ほとんどすべての対に回文的な意味の継承と転換が認められたのである。

七組の中で、爻辞を共有するのは三組あった。

損卦の六五と益卦の六二

夬卦の九四と姤卦の九三

既濟卦の九三と未濟卦の九四

なぜこのように、爻辞の共有はいずれもひっくり返して向き合っている爻同士に見られたのか。偶然といえるのか。

爻辞の共有とまでは行かないのだが、

既濟卦初九の「狐が尻尾を濡らす」と未濟卦上九の「狐が首を濡らす」

既濟卦上六の「其の首を濡らす」と未濟卦初六の「其の尾を濡らす」

が、それぞれ卦の始まりと終わりで回文的に首尾よく噛み合っているのも、偶然といえるのか。

屯卦六四、結婚を求めて意中の人のところに赴こうとする娘に向かって、きつとめでたく結ばれるだろうと励ます爻辞に対して、ひっくり返して向き合う蒙卦六三が、金持ちの男にすぐなびくからこの女を娶るな、という真逆の爻辞をぶつけている。回文で言う、まさに「夫憶妻兮父憶兒」的な傑作である。これも偶然といえるのか。そもそも主として啓蒙を「象」とする蒙卦はなぜ向き合う屯卦の嫁入りの「象」を取り入れているのか。

既濟卦六二に、婦人が車の蔽いをなくして外出できないように、とじ込められた光の「象」があったが、ひっくり返して向き合った未濟卦九五では、光が燦然と輝いている。落とし物は追わなくとも七日もすればあらわれるだろう、という既濟卦六二の爻辞は、一巡した未濟卦九五を暗示していないか。そう解釈するのは恣意に過ぎないと言われかねないが、もし卦の形が相反するペアに回文的関係が認められるならば、そうした解釈もありうるのではないだろうか。

歡樂に耽る喜びを吹聴する豫卦初六は、謙虚の名声をとどろかせている謙卦上六の反対だ、という古注もあったが、このような爻に見られる回文的な反対は個別的な事象ではなく、もっと易經の中で広く認められないのか。

易經の理解に欠かせない概念のひとつに、「応」がある。すなわち内卦と外卦の第一爻、第二爻、第三爻どうし、いいかえれば、初と四、

二と五、三と上のそれぞれのあいだに、陰陽が違えば、互いに応じ合う関係があるとされている。たとえば、臨卦の初九と六四は一陽と一陰で感じ合う関係にある。初はふつう力不足で弱い立場にあるものだが、この卦では六四の陰爻と感應してその力添えを得ているから、卦辞に民に臨むことができ、吉と出ているのである。逆に比卦の六三は、どこにも応じ合う相手がいないから、八方ふさがりで、「大凶なることというまでもない<sup>14)</sup>」とされる。

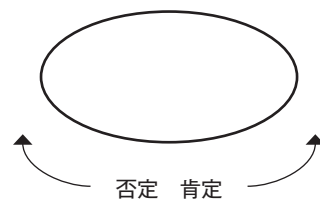
応じ合うことは循環往復することでもあり、易經を貫く思考様式とも言える。ひっくり返した爻どうしにみられた向き合いも、同じ思考様式による「応」のひとつと言えないのか。

石川九陽の『中國書史』に次頁のような興味深い甲骨拓本が掲載されている。

亀甲の中心線を真ん中に左から右へ、「丙子ト／韋貞／我受／年」(丙子にトす。韋が貞う。我れ年を受けんか)、反対に右から左へ、「丙子ト／韋貞／我不／其受／年」(丙子にトす。韋が貞う。我れ其れ年を受けざるか)、という豊作を何う占文が刻まれている。同じ問いを肯定と否定で繰り返し、しかも左右反対に並べている。

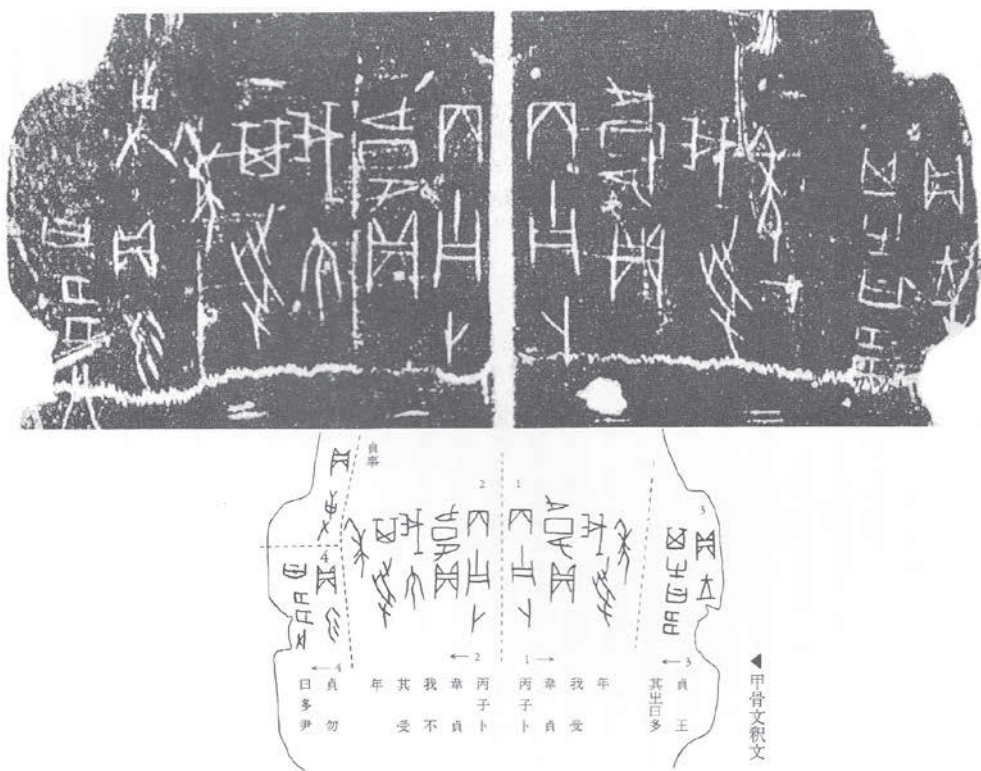
こうした肯定と否定を双方向に並べる書式に対して、石川は対称意識と陰陽意識を指摘している<sup>15)</sup>。

ところで、この左右反対に刻まれた占文の方向を示す、石川の付けた矢印1と2をそのままぐると延長すれば、円になるだろう。



双方向に並べられた肯定と否定のあいだに、陰陽のように応じ合い、循環往復する運動があるのではないか。それが後の易經の先蹤をなしたのではないか。

あるいは爻辞の作者ははじめから、上下転倒



する卦をペアとしてとらえ、一本一本の爻も含めて、ひっくり返しながら向き合うように、交辞を構想していたと考えられないのか。

本稿は、以上のような諸々の疑問を抱きながら考察してきた。そうした疑問には易経の成立過程に関わる問題も含まれているが、本稿がそれらに取り組むきっかけに少しでもなっていればと思う。

(本研究は同志社女子大学教育・研究推進センター2014・2015年度研究助成金を受けている)

### 注

- 1) 本田濟『易』朝日新聞社 1997年 639頁  
本稿における易経の訓読は基本的に本田濟の『易』に従う。ただし、一々示さないが異なる場合も時々ある。
- 2) 回文は表音文字の場合と表意文字の場合とでは性格がやや異なる。日本語においては、「世の中ね顔かお金かなのよ」は後ろから読んでも全

く同文となる。漢文においては、たとえば「婦未婦、君系誰。傍看芳花嫩柳迷、路長西更西。西更西、路長迷、柳嫩花芳看傍誰。系君婦未婦」は、両端から読めば同文だが、真ん中から二つの作品に切断してそれぞれを後ろから読めば、異なる文となる。また「夫憶妻兮父憶兒」のように、意味が正反対になる場合もある。本稿における「回文」は主に、漢文の回文を指し、逆向きにも読める文、という意味で用いている。

- 3) 拙稿「回文にみる漢字文化的思考」参照。『総合文化研究所紀要』第29巻 同志社女子大学 2012年3月
- 4) 同1 345～346頁
- 5) 黄壽祺、張善文『周易譯註』上海古籍出版社 1989年 348頁
- 6) 同1 363頁
- 7) 同1 371頁
- 8) 同1 509頁
- 9) 公田連太郎『易経講話』四 明德出版社 昭和33年 547頁
- 10) 三浦國雄『易経』角川ソフィア文庫 平成22年 249頁



- 11) 同 1 90 頁
- 12) 諸注のなかで、管見のかぎり、陳鼓應・趙建偉の『周易今注今譯』（商務印書館 2005 年）のみ、「膏」を婚礼と結びつけている。屯卦が嫁入りの「象」を多用しているので、前後とのつながりを鑑みれば、その解釈に一貫性があるように考え、それに従う。
- 13) 同 1 105～106 頁、113 頁
- 14) 同 1 114 頁
- 15) 石川九陽『中國書史』京都大学学術出版会 1996 年 50 頁  
石川九陽『書 筆触の宇宙を読み解く』中央公論新社 2005 年 71 頁